梅窓筆記

乾

1026
之
1
1 貴 5
29
1

僧5門
帙29
巻1

蔵書印

梅窓筆記巻上目録

神樂庭火末句ウタハサル事 一丁オ
繕綿 一丁ウ
琴ノ柱畏 一丁ウ
殺礼 一丁ウ
入襴袍 二丁オ
物吉 二丁ウ
寄障子 二丁ウ
節會袍 二丁ウ
笏ニ一位ノ木ヲ用ル事 三丁オ
島臺 三丁ウ
松茸狩 四丁オ
鼻捻 四丁オ
長柄橋柱文臺 四丁オ
年忌法事延引ノ事 四丁ウ
誤字ヲ容易ニ改ヘカラサル事 四丁ウ
三嶋暦 五丁オ
儒学ニ新舊ノ二義アル事 五丁オ
藥院 五丁ウ

廣島市立
鶴圖書印

毯代　五丁ウ
論語ノ題号讀ミセ　六丁オ
御寄掛　七丁ウ
當屋　八丁オ
伊勢講　九丁オ
蚊屋　九丁ウ
野跡ノ寫經　十丁オ
茶并茶具ヲ打枝ニ付ル事　十丁ウ
額ヲ書ニ禁忌アル事　十一丁オ
大臣ノ室家ヲ北政所ト申ス事　十一丁オ
障子　十一丁ウ
醫經ヲ講スル事　六丁オ
左右ヲ云テトヨム事　六丁ウ
御出奈　八丁オ
留主所　八丁オ
氏神ノ神事ヲセザル崇ノ事　九丁ウ
新作ノ硯試筆ノ事　十丁オ
色紙形寸法　十丁ウ
七夕歌梶葉ニ書事　十丁ウ
馬腹帯　十一丁オ
中酒　十一丁ウ
鞠ノ時扇ノ指ヤウ　十二丁オ
入道ノ後魚食ノ事　十二丁ウ
平調板　十三丁オ
隼人ノ犬吠　十三丁ウ
バウゾウ　十三丁ウ
水湯　十四丁オ
半臂ノ句　十四丁オ
年始ノ試筆　十五丁オ
法師ノ醫ニ勸賞アリシ事　十五丁ウ
九献　十二丁オ
御德日　十二丁ウ
土用　十三丁オ
一日昇殿ヲ聽ル事　十三丁ウ
纐纈　十三丁ウ
三方　十四丁オ
大日本紀　十四丁オ
半臂ノ着様　十五丁オ
小漬飯　十五丁オ
武家傳奏　十五丁ウ

御修法　十六丁オ
假名日本紀　十六丁オ
菅公書寫涌出品　十七丁ウ
北面　十八丁オ
肩衣ガリヲ著ル　十八丁ウ
守札　十九丁オ
五色　十九丁ウ
尼ノ和歌懐紙　十九丁ウ
脂燭ノ詩　二十丁オ
サゲ尼　二十丁ウ
千本通　十六丁オ
万葉集古本　十六丁ウ
中旬　十八丁オ
禁國　十八丁ウ
物ノ枝ニ鳥ヲ付ル　十九丁オ
典藥寮ノ現任　十九丁オ
風炉ニ入ルト云フ　十九丁ウ
七夕七遊　十九丁ウ
灸治ノ暇　二十丁オ
手筥ノ蓋ニ菓子ヲ盛ル　二十丁ウ
蠻繪ノ袍　廿一丁オ
大宮川　廿一丁ウ
鏡餅　廿二丁オ
無位ノ袍　廿三丁オ
婚礼ノ時ノ被ノ　廿三丁ウ
年忌取越　廿四丁ウ
二星ノ影ヲタヒニウツス　廿一丁オ
平胡籙差様并九緒付様　廿一丁ウ
ほのゝゝ明ノ浦ゝ分ル者ノ　廿二丁ウ
東京錦　廿三丁ウ
四拜拍手　廿四丁オ
平家ヲ語ル盜鵠　廿四丁ウ

以上九十條

梅窓筆記巻上

神樂ノ庭火ノ歌ノ末句ヲウタハズ神樂ノ譜ニモ末句ニハ曲ナシ所謂ハシレ子ビ古今著聞集六管絃哥舞部云鳥羽院八幡ノ御幸ニて御神樂ノ儀ありけるに中略後前司季兼朝臣庭火のかゝりをとりて外山なるうゝ時おほせるふを末句をうゝとて季兼朝臣ちゝまりて其説を志らねゝうゝと世人いとゝ梯のふりゝ末句をうゝとハげるハ故實にく侍となん下略トアレバ末句ヲウタハザルモフ

ルキヿナリ

長秋記大治五年九月五日取要琴柱畧薄様挾絃而臨期博陸召資信返給琴仰云立柱可進也トアリ石山寺縁起ニ柱ヲ畧タル繪アリ其圖巻末ニアリ

江次第内弁細記ノ繕綿ヲツクロヒワタトハ訓ヘカラズムシリワタトヨムヘシ

同條ニ殺礼ト云ハ爲ベキ礼ヲ畧テセヌヲ云ナリ礼ヲ殺ト云コヽロナリ故ニサイレイトヨムベシサツトイヘハコロスニアラズ

義タガヘリ左經記萬壽三年四月二日取要奏宣命見参ハ之時外記内記等上卿雖過前磬折不居又叙位除目時取筥文之外記又不居准此等儀不可居欤者仍不居也仰云彼文等参奏之間祭礼ハ不居欤トアリ殺礼ノ假借ニ祭礼トカケリ

同條表衣襴放紐トアルハ古今六帖哥ニ

なほ枕ならべしかしらきくはとけさりきやハ下の入紐トアル下紐ノヿナリ入紐トハ今ノ表衣狩衣ナト頸紙ニ著タル男蜻蛉女蜻蛉ノヿヲ入紐ト云ナリ同心結ヒ云ヘシ入紐ノ襴ニ著タルヲ下ノ入紐ト云當時ノ表衣ニハナケレヒ昔ハアルヘシ南都東大寺若宮八幡宮所蔵舞樂ノ新鞦鞨ノ袍ニ下ノ入紐アリ其圖巻尾ニアリ

江次第云元日拜天顔物吉ト云ヒ又執聟条物吉女 板本二物

告トアル ハ誤ナリ ト云物吉ハ最吉ノ假借ナリ玉海文治六年正月

十一日入内御衾支 中暑 及晩持來使左衛門督置帳中件

人殊夫婦之間最吉之故也トアルニテ知ヘシ

禁祕御抄 二間条 懸御本尊寄障子也ト点セルハアシ、懸御

本尊寄障子也トヨムヘシ左近ノ陣ノ西内衙門ニモ寄障子

アリ寄障子ト云モノヲ立テソノ寄障子ニ御本尊ヲ懸

ルト云ナリ二間ヲ夜居僧ノ候所トセシハ後ノコトニテ元

ハ中宮ノ上御局ナリ河海抄ニミエタリ

今時モ節會ニ預ル人ハ裝束ヲ刷フナレト昔ハ節會袍ト

テアリトミエテ古今著聞集第三 政道 昔ハ人の裝束を

なへてとりてそなたらる所院大納言の消息よ先代

の時節會袍借献ちとかゝ是たんなるハ若公の袍

とそほのゝとる拍れ人よかすとうるけるとそト

アリ

笏三位ノ木ヲ用ルトハ雲御抄 山部 くらぬ いやたりの岑六位笏木伐る山之 又三

玉集飛彈の國ヨリ出て基綱卿位山の一位の木を笏乃

料よのゝせらゝ時ハ位山くねちうゝ我こゝ乃をハ雲ふとうて

トアリ一位ノ木今飛彈ノ國ヨリ著ナトニ作リテ都ニ

未ル木ヲイチ井ト云ヘト櫟ニアラスアラヽキナリ物産者流ノ説ニ廣東新語ニアル水松ト云モノニ形似タリ位山ニ生スルヨリイチ井ノ名アルナリト云リ又櫟モイチ井ニアラストンクリノ類ナリト云ヘトコレハ後世ニ物産ノ精シクナリシヨリノ論ニテ既ニ和名抄ニ櫟ヲイチヒト訓シ松尾ノ摂社櫟谷ヲモイチヒタニトヨムカラハ往昔ヨリ櫟ヲイチヒト云カ俗ナルヘシ今更ニアラタムヘキニアラスイチヒノ假名昔ハイチヒ中比ヨリイチ井トカケリ

嶋臺ハモト洲濱ナリソレヲ後ニハ嶋臺ト云リ永享九年十月朔日行幸日記（後花園院義教卒）嶋御盃の臺トアリ

松茸狩ト云フモフルキフ也愚昧記安元三年九月廿六日（取要）向光明寺爲狩松茸也山上候假屋（竹柱菖蒲葉）於此所盃酌トアリ狩ト云フハ求ト云フ也紅葉狩櫻狩ミナ同シ

鼻捻ト云捧ノコトキモノ古代モアリトミエテ人車記仁安二年十月廿一日（取要）左右居飼廿人（裝束如常但大烏帽子蒲扇鼻捻已上捧腰ニ行列ス）

長柄橋文臺ノフ明月記元久元年七月十六日（取要）かるかやの橋ノ橋柱（所ニ残ル）本作文臺（是院御物今日始被出ニ和哥所）トアリ後深草院宸記永仁二年六月廿五日甲辰天晴風静此日皇太子御書始也（中略）黒漆文臺云々アリシハ和歌ノキノ文臺トハ製造タガヘリ

年忌ノ法度ヲ引上ノ例ハ多カレト延引ノ1南方紀傳
云貞治六年三月十三日北帝長講堂ヘ行幸ナル後
白河法皇百年忌の御追善ナリ十七
年ちゝ世上うちつゞき兵乱ようりいまて延引ト
アリ

誤字ヲ容易ニ改ムヘカラサル1卧雲日件録宝徳二年四
月十七日大光明寺来話次及内外書中不可輕改誤錯
文字之支般若理趣分中有若地方所流行此經之文
或改地作他不可乎此品於欲界頂他化自在天所説故
指下方為地方耳況大般若一部中又有地方字今現

流布理趣板行本已改他畢云〻

三島暦ト云1古来アリ日用工夫集空華老師 應安七年三
月四日浴于熱海蓋三島暦以是日為上巳節故作詩
記之

儒學ニ新舊ノ二義アル1日用工夫集空華老師 康暦三年
九月廿二日取要昨日儒學者講孟子書其義各不同如
何余曰所見不同也近世儒書有新旧二義程朱等新
義也同月廿五日取要問新旧二學不同如何曰漢以來及
唐儒者皆拘章句者也宋儒乃理性達故釈義太高トア
リ此比ニ近世トアレハ章句學理學ト二義ニナリシ1モ久

シキ〻ナリ藤惺窩ニ始ルニアラス

施藥院ヲ藥院トハカリ云施藥院ノヨミノ死藥ニ同シキ故ナリ康富記文安五年正月一日取要藥院保家朝臣トアリソノ外藥院使ナトモカケリ

毯代ヲハセン代トハ云〻カラス宣胤卿記永正十三年十二月十八日取要不敷毯代事是ハ當時無候哉此毯代東山左府述作名目抄ニセン代ト被点候及數ケ所欽センノ音不審候其上セン代ト云物公物不承及候玉篇毯他敦切又氣ヒン同被用此候靴氈韻府分明候トアレハ名目抄モ強ニハ採用セラレス

醫經ヲ講スル〻類聚国史天長七年十二月壬寅准明經博士賜講醫經博士料第百七上典藥寮

小出永菴論語序說抄云題号之支鄭玄カ註ニハ種々ノ說アレ氏今用井ス用ユル所ハ吳氏程カ註ナリ其說ニ曰論ハ撰也次也孔子及ヒ弟子ノ語ヲ撰次ス故ニ論語ト云今按スルニ此說ノ時ハ倫ノ音ナリ語ヲ撰ヒ次ツルトカヘリタル心ナリ書ニ對シテ讀ム時ハリンギヨト云ベシソラニテ唱フル時ハロンゴト云ベシ此レ一ツノ故實ナリトアリ題号ノ論ノ是非ハシラ子氏ソラニテ唱ル氏ハロンゴト云ハ故實ナリト云ヘルハ是ナリ論語ニカギラス何ノ書ニテモ此ノ准拠ニテ称呼スヘ

シ又永菴カ云後ノ人トシテ先ノ人ノアヤマリヲ議論スルコハヤスシ其時ニ生レテ其人ノ支業ヲ任セハ中々及フヘカラスト云ヘリ

万葉集ニ左右ヲマテトヨムコト石山寺縁起第二巻の伺書ニ康保のころ廣幡の作息所乃ヤさせ給ふるにより源順勅をうけたまはりて万葉集をひらけく点しけるにことゝろ終ぬ所〳〵おかしくて当るかゝりのやさむとてあつりにくり左右とよめしのゝ様ことゝらもてゝ下句のたもとうあむしゝてゆく袖く大津の浦ふく拍おかせあるまゝ約あひとりくるうゐ付乃おきれ左右のもゆめてゆほきてくるものをおしまるすとておのうとちゐてようとふこゝ伝いひなるこはしめてこれもくろを作とり作るとそ又万葉仙覺注釈第一下源順石ふ示系義して此奇とおもふる才智をもるへき示現を蒙るへきの由願ふ祈請せし終て七ケ日夜を尽て志かうして教て示現をもつる間退心をおこして京完ゝ帰らんと欲す其夜大津の色ふ旅宿を暁天に却りて講家乃椹人出てうとをしれハ旅宿の主人とおほしきもの馬荷を付る一の早まあつ片手をもつくこれを抑ぎ主人乃云まてをりて

抑もいろ〳〵まぎらはしおいて順序の定をえていくよはて
ふかとこれを和すけて此集乃中ふはゆくとゆふるに
ハ或ハ左右ふかき或ハ二ほとゝけるハ皆ハ義也ト云リ石
山縁起ト大同少異ニシテ註釈ノ文ノ方ハ義分明ニキコエタリ
仙覺抄ハ奥書ニ文永六年二月廿四日記之訖仙覺在判ト
アリ石山縁起ノ詞仙覺抄ヲ以テカケルカ又カヽルイヒ
傳アリシニヤ縁起ノ詞ハ万葉ノ釈ノ為ニカヽ又モノ
ナレハ義クハシカラス
南都東大寺三蔵寶物圖ニ御寄掛ト云モノアリ三国志曹公
作歌案卧視書六朝人作隠嚢柔軟可倚トアリ此隠

嚢ニテヤアリケン圖巻尾ニアリ
世俗ニ御出祭ト云フアリ長秋記長暦三年六月七日乙酉
大雨祇園依出給主上行幸事此暁下畧トアリコレヲヨリ
御出ト云ナルベシ本儀ハ御輿迎祇園社及吉田木瓜大
明神ノ祭日記御出ノ日ヲ御輿迎ト記セリ
神夏ニ當屋ト云フアリ吉田鈴鹿家記應永六年六月十日庚
申晴天當屋鈴鹿勝昌中畧始テ神夏ヲ勤之トアリ今モ諸
社ノ祭礼ニ産神ノ祭ニ町家村々ナトニモ當屋トテ勤ル
アリ
畱主所ト云フヲカケル文書アリ未詳或説ニ守介ナト常ニ

國衙ニ在テ政ヲ行サル故ニ守介ヨリ國衙ヲサシテ留主所ト称スルト云リ是非ヲシラス留主所古文書吉田ノ社神供所司家ノ所蔵ヲミタリ又鴨社ニモ留主所ト書ル古文書オホシ所司家蔵左ニシルス

廳宣　　花押

可早任先例停止吉田社領造伊勢大神宮留守所役夫工米國衙催促事

右彼社司訴狀偖件役當社領兼安文治被免除畢而建永京濟今度可依其例者可為京濟之處國衙使相具神部乱入社領依致狼藉有限之神支多以闕怠云ヽ早任先例停止国衙使等乱入催促宜令京濟之狀所宣如件以宣

寛元三年十二月

介源朝臣

伊勢講春日講稲荷講ナト云テ會集スルヿモ近年ノヿナラス吉田鈴鹿家記永享二年八月来ル廿八日伊勢講私所ニテ仕候云々同月春日講中皆大和ヘ参云々同記應仁元年十二月聖護院村田中村吉田村中畧春ノ稲荷講ニ三

ケ村衆寄合被申候
古今著聞集仁安二年閏月廿一日吉田祭ニて伶
人ニ信隆朝臣氏人ニ為ら神楽もせく仁王経を行
ける小法師ハ火ハ法子にもえ付く家焼てよけ
る所ニ火移らぬ氏神ノ神支ヲセサル崇ナ
ルベシ
蚊屋ト云モノ古代ニミエシハ皇大神宮儀式帳ニアリ春日權現
験記ノ画ニ白ノ蚊帳ヲ掛タル画アリ又吉田鈴鹿家記室
徳元年四月九日花園殿ヨリ御葛籠一荷ニ蚊帳一張
ヘリトリ一枚小夜着一ツ御本所江参コノヘリトリト云
ハ今云寝ゴザナルベシ
新作ノ硯ニ筆ヲ試ル中右記長兼三年三月廿三日左
兵衛督被及ニ新作硯筆試之処誠一物也誠為悦仍
書之佳辰令月歓無極万歳千秋樂未央
入木奥儀抄ニ世尊寺行尹卿ノ野跡ノ経ヲミル傳アリ京
都小川本法寺ニ本阿弥光悦ヨリ寄進道風真跡法花
経アリ行尹卿ノ傳ニ符合セリ二行ヲ摹テ左ニシルスソ
ノ傳ハ入木ニ専門ノ人ノ妨ナレハコヽニモラセリ

出于世間猶如大雲充潤一切枯槁衆生
以来復過是數无量无邊百千万億阿僧祇

同抄ニ色紙形ノ寸法事竪サ〻寸法ヲ取テ其ヲ十六分ニワリテ今ニ分ツ〻メテ十四分ニヨコサ一ノ廣サヲ可切也是カ吉撰ニテ有也

茶并茶具ヲ打技ニ付ル〻北山抄仏名条天暦九年十二月廿二日取要茶并茶具二裹付五葉技

七夕ノ歌掲ニ書〻管見記嘉吉元年七月七日辛丑晴七種詠書掲葉手向ニ星了

入木奥儀抄ニ額ニハ火ノ字堅忌之仍丙丁ノ日ハ不書也トアレド権記寛弘六年八月四日丙戌奉書北野宮額トアリ行成卿ハ忌レザルトミエ

平家物語九宇治河手綱を馬のゆのしたにくくりてたゞあふれふ〻ふ〻すの〻はるひをとゝいくろさめたりける

盛衰記二十五宇治河戔馬ヲ留鐙踏張(タチアガリ)立舉弓ノ絃ヲ口ニ噛(クハ)腹帯ヲ解テ引結〻シメケル云〻挑花藥葉ニ腹帯由木摘トアルニテ上腹帯ヲ鞍ノ居木ノ間ヨリ通テ前輪ニテシメルナリ古画ニミエル腹帯ミナ此定ニミエタリ圖巻尾ニアリ

攝關ニナリ玉ハヌ已前ニ政所ト申〻玉葉治承三年十二月十日

兵部卿入道信蓮来數刻談話御一家皆大臣後雖攝籙
以前以室家称北政所延久元永例也
家屋ノ隔ニ立ル障子ヲ今ハ襖ト云ヘト障子ナリ古ヘハ絹張
ナリシヲ後ニハ唐紙ヲ以テ張シ故ニ唐紙ト云名モ起レリ
台記別記久安六年正月七日取要寢殿簾中調度未立上達
部座障子可張絹今日猶為唐紙不可然九日張絹トアレハ唐
紙ハ畧ト三エタリ今俗ニ障子ト云モノハ明障子也障子ニモ
種々ノ名目アリ通障子鳥居障子絹障子唐紙障子紙
障子小障子ナト也
食時ノ中ニ酒ヲ飲ヲ中酒ト云フ酒茶論云又飯後飲謂之中
酒古註云不醉不醒謂之中トアリ
酒ヲ九献ト云フモ我邦ノ俗ニアラス潛確類書云九献宗廟之
祭具九献之礼ト云フアリ
鞠ノ片扇ノ指ヤウ親長卿記延德三年四月十九日陰晴飛鳥
井中納言入道許明日之儀治定云々中畧次予示之今度扇指
度之由命之尤可然又予指撓有種々趣答之誠有種々
說指撓三撓指所三ヶ所也先刀指ト云如刀指也一故籙指
ト云矢ヲフタル樣ニ指モ一笏指ト云如指笏指所之事於
座辺指之一進立送ニ指之一立定樹下指之一於同輩之所
者道々指之

御德日ト云フヤコトナキワタリニハアリ年々ソノ日ニハ何ゟモ
憚玉フハ衰日ノフニテ誰ニテモ年々衰日ハアルモノナリソノ
日ハ拾芥抄ハ卦部ニテミルベシ續古事談堀川院御時取要
其日主上殿上ニテ人々ふ連句いとせられけるに宮賢夫句
いとゝ侍ゝれけるを八ちるゝ〻の衰日やたゝかりけり
ゆゆしきことなりとて主上殿上の暦をとりて御覽すれば己巳日
衰日いまこそ知るちるゝか君をあはせるさゝ連
句いたゝめにけるのもれいかて博士ゝ成へきと仰られけ
トアリ巳午亥ハ衰日ナシ
入道ノ後奥食ノフ親長卿記明應二年八月廿七日取要今日

予落髮同四年二月六日取要竹内僧正尋申云著袈裟之
後不可奥食歟但或仁云後成恩寺殿令懸袈裟給
即有御奥食云ヘ御返答云雖被懸袈裟奥食不可苦
云々
暦面ノ土用ハ土王ナリ王ノ字ヲ避テ土用トスルフ故實ナリ
ト谷重遠秦山集ニ三エタリ
門生土佐人秀金問云秦山集曰我朝律學極精近時淺利
撿校尤妙達東寺宝藏有唐製十二律及平調板トアリ
今ニアリヤ答云重遠ノ傳ヘ誤リナリ平調板東寺ニハナシ
大通寺俗ニ東寺ノ尼寺ト云ニアリ然テ唐製ニアラス圖卷末ニアリ十

二律ノ竹ハ尋常ノモノナレハシルサズ

夕、一日昇殿ヲユルサルヽコアリ平戸記仁治三年十一月十一日取要今夜五節参入中畧受領長門国司大内記高長一日被聽昇殿

上世ノ遺風ニテ隼人ノ犬聲セシコアリシカ絶タルモヒサシキコトヽ也小右記長和元年十一月廿二日大嘗會隼人不發吠聲諸卿一兩相催絶吠不似例声トアリ既ニ絶ントスルノ端也

纐纈ハ錦バカリノ名トオモフヘカラス染タルモアリ續日本紀和銅六年六月辛亥取要染作暈繝色トアリ

バウゾウトハ今ノ雜煮餅ノコナリ烹雜トカケリ御厨子所預紀宗國記明應六年十二月七日取要三献公家衆ボウゾウトアリ

今ノ三方ト云モノハ衝重ナリ八寸臺ハ足付ナリ宣胤卿記云永正十四年十月五日取要公卿衝重殿上人前足付トアリ足付ハ足打ニテ折敷ニ足打タルト云コトナルヘシ

今人ノ入湯ノ湯ハ水湯ト云モノナリ水風呂ト云名アルモ遺風ナリ台記久安三年二月十六日取要自今日始潮湯正法須水湯七日後始之同月廿七日醉復浴水湯トアリ潮湯ニ對シテ水湯ト云ナリ

台記久安四年四月廿三日季房朝臣来話大日本紀事トアリ昔ハ大ノ字ヲモ加テ呼タリケン

和歌ニ半臂ノ句ト云ハ腰ノ五文字ノコトヽ也無名抄ニ月といと

んとて久うとゝまる山ふかんとてあしひきといめハつね
なるすゝきをけしめれるゝ字ハさせる事なし
こゝの句ゝとゝまるゝ繁のやとめに至てゝ
いとしら雪もいとゝきふるまへるけとゝもれる
こゝのき人うれを八半臂句とゝいひ伝るけんひハさ
せる用なしめるれとも意ゝとくれ申ゝかゝりと
ゝるものゝ雪ハ三十一字ゝく程の物なゝにせり
とゝ成ゝいれきをめんゝハむるゝきゝとゝ八ひゝとゝ
ちりとゝ侍すゝくゝあゝねとけをんひの句八必ゝれ
とゝりて姿をかゝるゝものゝ

半臂今ハ裝束ノ衣紋家ニ著セヤウノ傳アリテ大緒ヲハ定結
ト云テコシニハサミ別ニ小緒ニテ結フヿナリタレヒ台記
康治二年四月廿五日取要半臂伊通曰正儀只以大緒結之何
可具小緒哉余曰諾自今以後不可具小緒トアリ
年始ノ試筆ノ吉書ニハ天筆和合樂云々トカクヨシ教長
卿ロ傳筆法才葉ニミエタレヒ和哥ヲカクヿモアリ二水
記永正十七年正月一日取要書吉書和哥一首任筆畢ト
アリ
小漬飯ト云ヿモフルキヿ也二水記永正十六年十一月五日取要
於御所各有御小漬御相伴也

法師ノ醫ノ御療治ニテ勸賞アリシ1後愚昧記永和三
年正月二日取要主上喉痛御惱之時殿酉道之輩篤直卿
繁成朝臣典藥頭雖被召之不能其驗令及難儀給仍
雖為沙汰外者士佛法師被召之間以針治令屬御減
給了旧院文和年中御腫物之時小松房悲阿弥ト号
法師參御療治御平愈了彼度被行勸賞被叙法印
後愚昧記應安二年三月廿八日取要又聞山門事今夕武家
付傳奏藤中納言武家使者攝津掃部頭云々トアリ又御厨子頂蓮
響音録ニ明應五年六月三日勸修寺大納言教秀武家

傳奏辭退ト親長卿記ニアリトカケリ
正月八日ヨリ被行シ御修法真言院中絶ノ、千八小御
所ニテモアリ御湯殿記天文三年正月八日ヨリ紫宸殿ニ
テ行ルヽトアリ
京都ノ西千本通ハ朱雀大路ノ東傍ナリソレヲ千本ト
云シモ久シキ1也後愚昧記應安二年四月一日入夜千本
邊有炎上トアリ
假名日本紀ト云モノハ假名ニテカキタルモノトオモフベカラ
ズ假名ヲツケシモノナリ釈日本紀十八任那日本府日本
紀私記曰案假名日本紀作任那之倭寧トアルニテ知ベシ

寧ノ字ハ宰ノ字ノ誤ナルベシ

万葉集ノ丁有職抄ニ右ノ外御本ニハ貫之カ書ル古今集御子左ノ後撰道風カ万葉ナト圓融院ヨリ一条院ヘワタリタルヨシ見エタリ源氏物語 梅ヶえ 紫源の浮門の

右万葉集をそ〳〵せ五人ロ巻撰記長保三年五月廿八日己亥故民部卿在世日被送續色紙一巻請書吉

万葉集仍書之東鑑建暦三年十一月廿三日己丑天晴

京極侍従三位定家卿 献相傳私本万葉集一部於將軍

家コノ外諸書ニ万葉ノコト三エタリコレラノ本イカナリシヤシラ子ト古筆手鑑ニ存スル処ノ彼是ノ万葉ノ小片數

枚ヲミルニ皆長歌ハヨミトカズ短歌ハ別行ニ假名ニカキテヨミ解タリ又伊勢國伊澤富山與惣右衛門所藏古筆

万葉全部アリ寄合書ナリ今摂津國河邊俵屋久左

衛門所持セルヲ懇望シテミシニ第一巻行成卿ノ真

跡ニ違ベカラスサテ又短哥ノミヲヨミ解テ長哥ヲヨミトカズサルウヘ世ニムツカシク解ナセシ莫囂圓隣ノ歌ヨミトカズ又今板本第一十四丁裏ニ河上乃云云ノ短哥常丹毛

糞名ト云句ヨリ間ニ二三行モ白紙ノ行アリテ常處女

煮手トカケリ疑フベキ一也又コノ古筆ノ万葉第十九ノ巻ノ

長歌ヲ宣命書ニセルトコロモアリ享保三年九月神田

道伴ノ極ハ筆者時代不同ナリ又本ヲミルニ同時代ノモノトミユレハ道伴ノ極疑ベシソノウヘ第廿巻ノ奥ニ元暦元年六月九日以或人本校合了右近権少将花押アルニモ極ノ不正ナルヿ明ナリ享保十三年戊申八月御薗意齋ヲ以テ梅谷殿ヨリ内々叡覧アリソノ時三巻ヲトヽメオカセ玉フト云リ

親元日記寛正六年七月廿二日松梅院ヨリ天神御筆涌出品一巻（絆紙金泥）私迫請取置之若君撫御誕生之時ハ必御産所ニ被召置之由申之卅ケ日之間云〻コノ経今ニアラハ尋テ拝見スベキモノナリサテ経文ノ本意ハ解（ゲ）セサレ氏涌出品ハ宝塔涌出品ニテ宝塔ノ涌出スルト云ヨリ誕生ノ片置ルヽヤコレニ習テ後世神道者流大祓ノ詞イヽイフ中臣祓ヲ段ヲ別テ祈禱ニ唱ルトテ第二段神孫降臨ノ詞ヲ降誕ノ段又平産段トス涌出品ヲ置レシニ似カヨヒタルヿナリ

二孟ノ旬ソノ外初旬新所旬ナト云ヿハアレト中旬ト云ヿハヽレナリ續日本後紀天長三年三月庚戌是中旬之初也天皇御紫宸殿賜侍臣酒トアリ朔庚子ナレハ庚戌ハ十一日ニアタレリ

上北面下北面氏所ノ名ナリ爲経卿記寛元四年二月廿一日

天晴院上北面始也上北面以殿上北面二ヶ間為其所下北面
副北築地有五間屋以件屋為其所トアルニテ知ベシ
禁國ト云フハコンコクトヨムベシ新任辨官抄位禄定結詞讀樣
支結詞殿上分可給国々禁國(コムコク)可給 不云禁国(キンコク)涉禁獄音故也 或説禁国禁字去声也予不用
此説コン此字呉音也冥用之
今ノ世ニ一向宗ノ徒佛前ニ向フトテ肩衣(カタギヌ)バカリヲ着テ袴
ヲキス古代モソノ類アリ十訓抄二 第二ノ十 大原の聖達四
人ゝ河内国石川郡にすみけり家をハ絲乃
直垂はうきゝく袴ハきもとのおよ紅葉してよろ
むしろ琴ゝとゝ取出ゝくもよりう

物ノ枝ニ鳥ヲ付ルニ小鳥ハ數羽ツクレド雄鴨ノ類ハ二羽ヨリ
ハツケザルニ數羽ツケタルフモアリ明月記元仁二年二月
八日 取要 剪紅梅大枝雄雉雌雉各十羽 如小鳥付也 大瓶入酒
送之トアリ
守札ヲハルフ明月記文暦二年五月十一日 取要 以賢舜令問在
友朝臣口舌病事不輕由占可修百怪祭由明日 吉 由領状同
十二日 取要 在友朝臣以次男令修祭相逢謝之屋四面打簡
典藥寮ニ頭助允屬ノ現任ノアリシフハツ子ナレド人車記仁
安三年正月十一日 取要 典藥頭丹波重長助藤頼時少允
和氣安信大屬清原宗友同為近醫師清原友重トヨクソ

ロヒテミエタリ

五色（コノイロ）ト云ハ爪ノ一管見記嘉吉元年六月廿四日己丑自朝降雨五色廿篭進上トアリ此外ニモ多ミエタリ餅ヲ十字ト云類ナルベシ

湯アミスルヿヲ風炉ニ入ト云ヿモ久シキヿトミエタリ管見記嘉吉元年七月廿日甲子霽殘暑甚入風炉トアリ

尼ノ和歌懐紙ノ一後深心院關白記永和元年九月十三日庚午今夜和歌御會也中略献懐紙二品禅尼重懐紙書白薄摂トアレハ尼ノ懐紙ハ白薄摂ヲ用ユルヿナルベシ

七夕ニ七遊ヲスルヿ親長卿記文明五年七月七日今日有七種事一鞠一揚弓一樂一郢曲依人々故障無之仍改圍碁了一和漢五十韵一和歌兼日七首題賦之一七盃飲

當時ノ戯ニ火廻ト云ヿアリ昔ハ脂燭ノ詩ト云ヿアリ玉海壽永二年正月廿五日辛卯天晴召中將於前脂燭詩兩度令作一度二寸開山花未遍春一度五寸竹間鶯語滑声又續世継去のちらをゑをとこのはせうまひらきゆよさめらぬ人くよかくしきいよはゆせたそくれかのうちなるのうちてひくさのうちくよりあちとちくおはきらゑてトアリ

女房ノ灸治ヲスルヿハ暇ヲ玉ハリテ里ニ下ヲル今ハ灸下（キウサカリ）ト云灸治暇（イトモ）ナルベシ山槐記仁平二年九月六日參關白殿

申實長朝臣灸治暇事トアリ

今ノ世ニ髪切ノ尼ト云ハサケ尼ナリサテ又ノチニ髪ヲオロシテ尼ニナリシトモアルベシ續世継ノ月 長暦三年五月七日

御くしおろさせたまふ御入道中納言

世を捨て宮ぬけ出ぬしきハむし成くわ

ぶてとこの女院へたくはつりまゐるさ所ゑに

はくの乃まを立きさのくちきハニてん世をとそむうさらはし

とゝはせたまへるハはめハ御くしをそり髪たまひて

のちみゝおろさせたまひんなるへし

手筥ノ蓋ニ菓子ヲモルト人車記仁安三年十一月廿一日 取要

註云文菓子三積盛薄撫蒔繪手筥蓋トアリ

褐衣ニ蠻繪ノ摺ヤウ玉蕊建暦元年十月廿八日蠻繪袍 師子形以

墨摺之目程 聊添朱 トアリ東寺ニ藏スル褐衣ニコノ定ニセシヲ存セ

リソノ獅子ノ圖巻末ニアリ又熊ノ蠻繪ノヤウ南都東

大寺若宮八幡ニ存セリコレハ繡ナリ其圖モ巻尾ニアリ

七月七日二星ノ影ヲウツストテ手洗ヲ設カ普通ノナラヒ

ニテ夫木集ノ哥ニモ

風たゝぬ夕ふ川のほ[illegible]の拍子たゝしの水ようつ[illegible]ハ

トアレト知信記天養二年七月七日夜有乞功奠事下官

依為行事着束帯参宮供奉奠物中畧東机未申角居

御鏡一面蓋トアリテ鏡ヲモテ手洗ニカヘタリ今モ手洗
ヨリ鏡ヲ用ユルガシレタフン
堀川ヲ大宮川ト云ベシ詞花集ニ
みるかゝはさらめてゝれハ君代よりひすめる堀川の水
トアルニ夫木集廿四
能〻〻のはる大宮川のなゝれてふゝひすめるかゝハゝ流り
トアルハ堀川ヲ大宮川トヨメリ
荒井筑後守軍器考ニ鎌倉殿ノ比スデニ平胡籙ニ矢サヽムヤ
ウ九緒ツケシヤウナト東國ノ武士ハシラザリシニ云〻東鑑ニア
リトハカリ本文ヲ出サヽリシカ東鑑文治五年正月十九日

庚戌若君御方結搆風流摸大臣大饗儀藤判官邦通
為有識營此支而近衛司相交平胡籙差撰九緒付撰不
分明之処三浦介預囚人武藤小次郎資頼平氏家人監物太郎頼方弟
彼箭事得故實之由発言義澄求伺御氣色内々雖可召
仰之若君御吉支也為囚人爭役之哉云〻仰曰早所厚免
也可令沙汰之者資頼開愁眉調進之
猪熊関白家實公記正治三年正月□日天晴取要早旦着直衣
見鏡トアルハ今俗ノ鏡餅ニ居ルヿニテ齒固ノ祝ナリ夫
木集ニ
ゝ代までとゝ彩をちらしておひうんとうゝふ猪のもちひさらめや

源氏物語初音の巻にもけふは子の日なりけりちとせの春をかけて
ことゞりよせて手ゝ跡のかきのまろきナトアリ此外
ニモ多カレド畧セリ
今昔物語廿四今昔小野篁と云人ありけるが罪ありて
隠岐国に被流ける時舟に乗て出るとて京に知
たる人の許へかく讀てやりける
和田の原八十島かけてこぎ出ぬと人には告よあまのつり舟
とよみたるをよそにて聞て横を立て九月許りのことや
夜ハ明離不寝して詠めたるに舟の行かふ篇か
く迄するを見て哀とおもひてかくなんよみける

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島がくれ行舟をしぞおもふ
と云て泣ける是ハ篁の帰りて語るを聞てかく
然るとくトアルヲミレハほのぼのゝ哥人丸ニアラス疑フヘキヿ
也歌ノ躰ハ篁ニアルベカシクミユ
和かくて仁明承和六年正月にそむきたりとておほきにいかり
しふ中畧同七年六月に小野篁召しかへされてもとの位
になりしかとそきこえたるうへのきこえをきゝてそ京へい
ぬけりしトアルハ無位ノ袍ハ黄袍ナレバナリコレ叙位スヘキ人
ノ叙位セサル中ノ無位ノ袍ナリ處人ノ無位ノモノゝ袍ニ
ハアルベカラス無品親王ノ黄袍トアルニ准擬シテ知ヘシ

西園寺實遠公所傳無撰者一冊教訓抄ニ大臣殿の坐
ゐは大文の屏りけ〳〵みくらにきのもとゝねを
きゝ〳〵仙源抄の一説ふとりき屏うにしき日右錦之カ
けとゝる見朱ゝ〳〵トアルナトヲ以テ東京錦ハヤ〳〵ト錦
ノコトスレト非ナリ唐ノ東京錦ヲコヽニテ擬シ織タルナレ
ハ唐ノ東京錦ト云ベシ

婚礼ノ時ノ被ヲ鴛鴦被ニ合歓被ニ云ヘリ河海抄 葵

註ニ鴛鴦衾者鴛鴦文錦被也ト云又潛確類書ニ合
歓被古詩客従遠方来遺我一端綺文彩雙鴛鴦裁為合
歓被着以常相思縁以結不解 注被中著絲絲之意 トアリ又鴛鴦

褥ト云モノモアリ同類書ニ鴛鴦褥西京雜記趙昭儀上
皇后遂三十五條有鴛鴦褥

皇朝ノ古礼ハ四拜拍手スルコトナリシカ日本紀畧延暦十八年
正月朔皇帝御大極殿受朝中畧減四拜爲再拜不拍手
トアリ此比ヨリオノツカラ四拜拍手ハ止テ北山抄本朝風
四度拜神謂之両段再拜ト云ヤウニナリテ神ヲ拜スルニノ
ミ古礼ノコレリサテ又拍手ニモハ開手長〻拍手短拍手ナ
ト云コトアリ今時ノ神ヲ拜スルニ二ツ手ヲ拍ハ短手ニテ延
喜式ノ假名ニシノヒテトアルモノニテ拍声ノ音ナキヤウ
ニ拍ヲ云ナリ玉海治暦四年二月四日丙戌天晴此日祈

年祭也中略祝師進庭中坐申祝詞十段別称唯即拍手上卿以下従之上卿拍手法不令有声手ノサキヲアハセテヤヲラ打合也一條禅閤兼良公江次第抄祈年祭条今案上卿拍手作法不令有声をのさ紀をあくせて面ばらくと打合也トシルサセ玉フニテモ不有声ヿ知ベシ

年四ヲ引上スルヿヲ取越ト云名目モフルキヿ也二水記永正十六年十二月十四日金譽十七面忌也明年正月也雖然年始依不ヒ年取越了

平家ヲ語ルヿ卧雲日件録文安五年八月十九日寂一撿校来中略予又問座頭話平家之由寂一曰昔為長卿者作此書十二巻留在播州其後曰性佛者上之於音曲而歌詠耳性佛之後曰如一撿校者有二弟子一曰覚一一曰城一々弟子城元居八坂城元次曰城意々々次曰城存存尚在焉覚一弟子有四撿校曰通一曰灵一曰景一曰清一某乃灵一弟子也寂一又曰今夏居奈良秋初歟洛トアリ平家ヲ語ル濫觴アキラカナリ